

犯罪者が許されない世界

—すべての人に潜む化け物—

高橋 崇之

(愛媛大学大学院教育学研究科)

はじめに

2008年6月8日12時30分過ぎ秋葉原で7人が死亡、10人が重軽傷を負う大事件が発生した。犯人の加藤智大（当時25歳）が起こしたこの事件は「秋葉原通り魔事件」と呼ばれる。本件は無差別殺人であったことや、歩行者天国を襲撃したということでこの事件は大きく話題になった。同時にネット社会が発達した影響で誰もがこの事件への意見を表現することができ、加藤は多くの人から非難された。

犯罪者等、間違いを犯した人間は根拠のないレッテルを貼られ社会から排除されるが、その働きが近年過剰になっていると思われる。本当に彼らは自分たちとは違う人間なのだろうか。

目的と方法

文献検索を用い、これまでに起きた凶悪事件と世間の反応、社会の流れから、普遍的に存在する人の負の側面とその対応を考えていく。

1. 無差別殺人犯罪者の生い立ち、環境、心理

「秋葉原通り魔事件」の加藤がなぜそのような行為に走ったか、加藤本人は否定しているが、証言から見える様々な要因として、成育環境や職場の待遇などがあげられる。「西鉄バスジャック事件」の犯人は当時17歳の少年だったが、学校の成績の低迷が原因で不登校になり、家庭内暴力が多発。母親に精神科病棟に入院させられたことを原因に無差別殺人を決意する。

これらの事件は理解できないような考えをする「化け物」が起こした事件ではなく、ただ普通の人間が犯行を犯すようになっていくことがわかる。

2. 犯罪者を過剰に叩く「第三者」

話題性の高い大事件が起きた場合、それはテレビでただちに報道される。昨今では携帯電話のカメラ機能とSNSにより誰でも情報を発信できるようになった。そして多くの人々が事件を知り、被害者や加害者の人物像までがわかりやすくなった。その結果か人々は被害者に共感し、加害者やその関係者を「法律を破ってまで」徹底的に非難するようになった。犯罪を犯した18歳以下の

少年は少年法によりそのプライバシーは守られるが、近年、話題になった事件の場合その少年法は度々破られる。加害少年の個人情報流出することにより、その家族までもが被害を負うようになっている。

3. メディアの問題と厳罰化

マスコミは話題性のある事件について熱を上げて報道するが、その見出しは非常に煽情的で偏見を含む場合が多い。「東京埼玉連続幼女誘拐殺人事件」の犯人、宮崎勤は「アニメオタク」だったため、それを取り沙汰にされ、「付属池田小殺人事件」の宅間守についてはその精神科への入・通院歴があったために大きく報道され、多くの人がレッテルを貼られることとなった。

そのようなメディアによるモラル・パニックの結果か世間は厳罰化の方向へと向かっている。

4. すべての人に潜む「化け物」

彼らを「化け物」とするなら、我々にもそのような一面は持ちうるものだということを反省すべきである。前述してきた様々な「私刑」を含め一般人による残虐な一面やレッテル貼りにより自分たちと異質なものを排除しようとする動きは決して正しい行いとは言えず、我々に「化け物」の一面があることを否定できない間違いは誰でも犯すことを考えれば、失敗を犯した人を受け入れる土壌が出来上がるのではないだろうか。

5. 犯罪を犯した人が復帰できる社会へ

各国では犯罪者が社会復帰できるよう様々な取り組みを行っている。

殺人犯であれ「悪」であると切り捨てず、更生、社会復帰までの努力を社会全体で行うことが、事件が起きた様々な背景の理解と、その結果の犯罪予防、相互扶助に生きていくことであると期待したい。

6. 結果と考察

加害者をただ非難するだけでは自分の中の「影」見ることを忘れてしまい、暴走していくことが懸念される。我々は「罪」を許さず「人」を赦す姿勢をもう一度考えていくべきである。